



平成 27 年度 2 期研究・実験補助者雇用制度の 利用者が決定しました。

平成 27 年度 2 期研究・実験補助者雇用制度の利用者は、16 名（女性 14 名、男性 2 名）の方に決まりました。

研究・実験補助者雇用制度とは

出産・育児・介護等で、十分な研究・実験時間がとれない研究者に対し、研究又は実験業務（注：教育関係の

業務は支援対象外）を補助する者の雇用経費を負担します。募集は、年 2 回（6 月、12 月）です。本事業は、女性研究者に限らず、男性研究者も対象となります。また、研究分野の文系・理系は問いません。補助者未定でも申請できます。

女子高生・車座フォーラム 2015 が 12 月 26 日（土）に 開催されます。

京都大学男女共同参画推進センターでは、京都大学の研究者や科学者の仕事を知ってもらおうと「京都大学を知ろう・研究者と語ろう」を企画しました。フォーラムでは、理系・文系それぞれにどんな研究分野や領域があるのか、なぜ今の分野を選んだのかといった大学進学に関わる話をはじめ、研究の面白さや苦労、専門職や研究職など大学卒業後の将来設計のための心得、あるいはまた、具体的に、たとえば子育てと研究生活の両立方法、研究論文の執筆や学会発表といった研究者の仕事内容など、さまざまなテーマについて、教員や大学院生、学生が疑問にお答えします。

京都大学がどんなところなのか、大学ではどんな勉強や研究をするのか、また大学卒業後の進路にはどんなものがあるのか、などなど、色々な疑問をお持ちのみなさん、京都大学の企画する「女子高生・車座フォーラム 2015」にいらっしやいませんか？

保護者の方々の参加も募集します。どうぞ奮ってご参加ください。



日 時	2015 年 12 月 26 日（土）10 時～17 時
会 場	京都大学医学部第一臨床講堂、他
参 加 費	無料
募集定員	女子高校生 80 名程度（先着順） 保護者 40 名程度
申込方法	男女共同参画推進センターホームページを ご覧いただき、お申込みください。 ホームページアドレス http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/
申込期間	2015 年 9 月 25 日（金） ～ 11 月 25 日（水）

Gender Equality Promotion Center

〒 606-8303 京都市左京区吉田橋町
電話 075 (753) 2437
FAX 075 (753) 2436
E-mail w-shien@mail.adm.kyoto-u.ac.jp
HP <http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/>

男女共同参画推進センターでは、子育てと仕事や研究の両立支援を目的とした様々な取り組みを行っています。詳細、利用方法については、センターホームページをご覧ください。http://www.cwr.kyoto-u.ac.jp/hoiku_kai

病児保育室「こもも」

「京都大学男女共同参画推進センター病児保育室」は、京都大学教職員・学生の子どもが、病中・病後のため幼稚園・保育園・学校へ登園・登校できない時、親が仕事や研究を休むことなく、子どもの保育ができる環境を提供する施設です。京大病児保育室では、京都大学医学部附属病院と連携し、看護師・保育士が常駐する安心できる環境において、病児の保育を行います。



保育場所	京都大学医学部附属病院 外来棟 5 階 ※東玄関（東大路通沿い）から入ってすぐ右にあるエレベーターで 5 階です。
対 象 者	生後 6 ヶ月～小学校 3 年生までの病中・病後の子ども
利用資格	京都大学教職員及び学生
定 員	5 名（隔離室を含む）

開 室 日	月曜日～金曜日
開室時間	8：15～19：00
利用料金	子ども 1 人につき、1 時間あたり 500 円 （昼食・おやつ代を含みます） ※保護者が学生の場合は、保育料金の半額を大学が負担します。
保育体制	看護師、保育士

おむかえ保育

「決まった曜日だけ子どもを保育園に迎えに行けない。」「急遽夕方に打合せが入り、保育園のお迎えに間に合わない……」などで、困っていませんか。そんな研究者・学生のために、男女共同参画推進センターでは「おむかえ保育」を実施しています。運営は、民間企業に委

託して実施しています。保護者に代わり、センターが委託している企業から派遣された保育者（シッター）が子どもを保育機関などに迎えに行き、男女共同参画推進センターで一時的保育を行うものです。

保育場所	京都大学男女共同参画推進センター保育室
対 象 者	生後 2 ヶ月～小学校 3 年生までの子ども
利用資格	京都大学に所属する学生・研究等に携わる教職員（日本学術振興会特別研究員を含む）
定 員	5 名程度（兄弟姉妹、年齢構成により異なる場合がある）

開 室 日	月曜日～金曜日
開室時間	17：00～22：00
利用料金	保育料金は、920 円～1,360 円／30 分（税込） ※時間帯により異なる ・利用は 2 時間以上、30 分単位で受け付け ・子ども 1 人についての料金です。 ・学生は保育料金のみ、大学が半額を負担します。 ・交通費・夕食等は別途実費が必要です。 ・状況により、その他利用手数料が必要です。

ベビーシッター利用育児支援

京都大学男女共同参画推進本部では、本学における教職員の仕事と子育ての両立支援を目的として、「ベビーシッター育児支援割引券」を発行して、ベビーシッター事業者が提供するサービスを利用した場合に、その利用料金の一部を助成しています。

対象事業は以下の 3 つです。

- ① ベビーシッター派遣事業
- ② 双生児等多胎児家庭育児支援事業
- ③ 産前産後休業時育児支援事業



保育園入園待機乳児保育室

「平成 27 年度保育園入園待機乳児のための保育施設」は利用を希望される方が多く、現時点で定員に迫るたくさんのお申し込みをいただいています。

京都大学男女共同参画推進センターでは、学生及び研究等に携わる教職員の研究と育児の両立を支援することを目的とし、男女共同参画推進センター内に、「平成 27 年度保育園入園待機乳児のための保育施設」を設けています。この保育施設は、自治体に保育園入園申請をおこなったが、入園待ちを余儀なくされている研究者等を対象とします。



保育場所	京都大学男女共同参画推進センター保育室
開室期間	平成 27 年 4 月 6 日～平成 28 年 3 月 31 日
対 象 者	原則として生後 9 週目～ 15 ヶ月未満の健康な乳児（15 ヶ月になる月の前月まで利用できます。） 例：2014 年 12 月 10 日生まれのお子さんの場合、 2016 年 2 月末まで利用可能

利用資格	京都大学に所属する学生・研究等に携わる教職員（日本学術振興会特別研究員を含む）
開 室 日	月曜日～金曜日
開室時間	9：00～18：00 （時間外保育は、8 時～9 時及び 18 時～20 時までとし、別途利用料が必要）

育児・介護ワーキンググループ

主査 山肩先生より 退任のご挨拶



情報学研究科
特定准教授 山肩 洋子

私は 2011 年 4 月から 4 年間、男女共同参画推進センター（旧 女性研究者支援センター）育児・介護 WG の主査として、主に待機乳児保育室の運営に携わってきました。待機乳児保育室は、京大に所属する女子学生や常勤の女性研究者の方々を主な対象として、認可保育所に入所できなかった 15 ヶ月未満のお子さんをお預かりする施設です。京大本部キャンパス周辺の認可保育園はいまだ入園が困難な状況で、復帰のタイミングによっては入園不許可となるケースが頻発しています。そんな中、この保育室によって勉強や研究の場に復帰できた方々が沢山いたことは大変喜ばしいことですが、一方で本当に遺憾ながら、利用申請をお断りしなければならない場面も数多くありました。生後 9 週目からお預かりする当保育室では、安全に保育できる環境を用意することは必須であり、場所の問題から、やむを得ず人数制限を設

けています。どこまで利用を許可出来るかは、その年の申請状況によって変わりますが、私も子を持つ研究者の一人として、預けられるかどうか分からないのは本当に困ります。一方で、運営側の立場として、安全の確保は必須であり、定員をどこまでも増やそうとは言えず、まさに板挟みなつらさを味わいました。しかしながら昨年から新しい環境に移設したことにより定員が 18 名まで拡充され、これまでお断りすることが多かった男子学生・男性教員や医員方々にもご利用いただける可能性が広がりました。また、昨年度まで 9 月以降の半年開室だったものが、今年度から通年開室となったことも大きな進展でした。今後も京大で子供を産み育てながら勉強や研究に励むことのできる環境が益々整っていくことを心から期待しています。育児・介護 WG のもう一つの大きな柱である介護事業は、昨年度から WG のメンバーに、がん看護専門看護師でおられる医学研究科の田村恵子教授が加わってくださったことにより、新たな発展を迎えることが出来ました。今後益々高齢化する社会において、京大が介護しながら勉強や仕事に携われる大学となることを願っています。

連載：研究者になる！－第52回－

興味に素直に従って

生命科学研究所・講師 大澤 志津江

執筆のお話を頂いたとき、正直なところ戸惑った。振り返ると、行き当たりばったりの人生で、ロールモデルになるような生き方をしていない。ただ、行き当たりばったりながらも、自分の興味が根底にあって、出会った方々から影響を受け、また支えられながら進む生き方もあるということを知り、学生さんに感じてもらえればと思い、筆を取らせていただきました。

中学の頃から、モノの変化、たとえば、「卵から個体へと発生する際に見られるダイナミクス」や化学実験において体験した「色や状態変化を伴う化学反応」に強く惹かれていた。なかでも、具体的な化合物は忘れたが、スチレン系の化合物からゴムを作る化学実験で、溶液から湧き出てくるゴムを夢中になって引っ張りだし、大感動したのが今でも忘れられない。目の前で起こる化学現象や顕微鏡を通して観察できる生命現象を理解したいと漠然と考えて、化学・生物の双方が学べる東北大理学部化学科に進学した。

ただ当時は、研究者になろうという気は毛頭なく、これもまた漠然とはあったが、修士課程まで進学して、その後、製薬会社あたりに就職するものだと考えていた。自分が研究者に向いているのかも分からなかったし、化学科は特に、修士からの就職口が多いと聞いていたのもあり、自然と「修士修了後は就職」との考えに至っていた。だから、学部3年の後期に研究室を選択するにあたって念頭にあったのは、就職するまでの3年間で学びたいことを学ぶということ。より興味をもった生物系の研究室に進み、さらに修士課程において三浦正幸先生（理化学研究所・脳科学総合センター；現・東京大学大学院薬学研究所・教授）の研究室の門を叩いたことが、その後の人生を大きく変えるなどということを当時は想像もしなかった。

三浦正幸先生は、細胞死を実行する「カスパーゼ」を哺乳類で初めて同定した先生。ちょうどその頃、細胞死に関わる遺伝子が次々と同定され、細胞死の分子機構の研究がさかに行われていた時期だった。死ぬという、一見消極的な現象にメカニズムがある（積極的に細胞を殺す仕組みがある）、そしてそれが生物の発生過程で大量に起きているということに興味を持って三浦研に入室し、いただいたのは、「マウス神経系発生過程で、いつ、どこで、なぜ細胞が死ぬのかを解析する」というテーマ。胎生期から生後のマウスの脳を解剖し、ひたすら切片を作成して死細胞を免疫組織染色により検出する、この泥臭い作業にすぐにのめり込んだ。第一に、発生期のマウスの脳の美しさ、なかでも神経細胞が長い軸索を特定のところに伸ばす様子の美しさたるや、何時間眺めても飽きない。第二に、実は死んでいく細胞を検出するというのはきわめて難しいのだが、わずかに検出された死細胞が組織上で数個並んで観察されたり、細胞分裂直後に死んだのであろう細胞があったり、予想外で、かつ何となく意味がありそうな現象に出会うことがあり、そのときに感じる楽しさがたまらない。何より、顕微鏡越しに眺めた現象に対し、一緒に

興奮し、関連論文を頻繁に持ってきて下さる三浦先生の存在も大きかった。また当時の三浦研には、博士課程の学生であった井垣達史先生（現在の所属研究室の教授）、研究員であった嘉糠洋陸先生（現・慈恵医大・教授）をはじめ、いわゆる研究のプロが多く在籍していて、日々一緒に昼・夜ご飯を食べに行かせていただき、ディスカッションをそばで聞かせていただいているうちに、研究自体が生活そのものになり、勢いで博士課程に進学した。

修士・博士課程は、投稿した論文が9連続でリジェクトされたり、決して平坦な道のりではなかった。ただ、反骨精神も働いたのかもしれないが、わくわくしながら顕微鏡を覗く気持ちがブレることはなく、観察した現象を追いたいという気持ちが揺らぐこともなく、研究員としてでも、技官としてでも、どのような立場であっても研究を続けたいと考えようになった。そして学位取得後は、組織を構成している細胞集団のなかで、どうやって死にゆく細胞が選ばれ、また死にゆく細胞が周りにどのような影響を及ぼすのかを、ショウジョウバエをモデル生物として解析したいと考え、井垣研究室（当時、神戸大学医学研究科）に研究員として移籍、現在に至る。

井垣研に移籍して、はや7年にもなる。2年前にラボが神戸大から京大に移転してからは特に、学生さんと一緒に研究を進めるスタンスとなり、実際に自分で手を動かしていたときは大幅に生活が変わった。自分自身で顕微鏡を覗く機会が減った寂しさがある一方で、やれることが増えた楽しさもある。また最近、数理生物・工学・数学分野の研究者達と共同研究を行う機会に恵まれ、それにより、自分一人では到達し得ない研究に挑戦できるようにもなって、今までとは違った研究の楽しさが見えてきた。現在は、学生の頃からずっと対象としてきている「細胞死」に加え、ショウジョウバエを含めた昆虫の外骨格形態（翅や肢、角など）を構築する原理を、実験・理論との融合研究により明らかにするという、学生の頃には思いもしなかったプロジェクトにも夢中になっている。こうして書いてみると、これまでずっと、きわめて恵まれた環境で、出会った方々に支えて頂きながら研究を満喫し（思うように研究が進まなかったことも含め）、気持ちに任せて生きてきているように思う。

今後について悩みがないかというと、そんなことは決していない。この先どのように研究を展開していき、自分のアイデンティティを出していくのか等、考えなければならないことは山積みである。ただ、一つだけ思うのは、同じ研究者であっても、生き方進み方は千差万別ということ。正解などここにもない。悩みながらであっても進んできた道で、やれることを精一杯全力で頑張る、そして何より、生命現象の美しさ・不思議さへの興味を大事に、それだけは、忘れぬようにしたいと思っている。

